



①オーダーメイドのギター製作を一貫して一人の職人が担当するカスタム部門には、職人歴50年以上という大ベテランも ②部品を保管する部屋では常にクラシックなどの音楽を流している。これは音楽を聴かせることで、振動しやすく、よく鳴るギターに成長させるため ③ネック部分は職人が一本一本、手に馴染むように木目を確かめながら削る ④「カリスマ的な存在だった先代の後を継いだプレッシャーはありますが、「ヤイリズム」を守りたい」と賀光さん

小さな工場、 はたらく人々。

いつも何気なく手にするものは、どこで生まれているのか。それはあの工場から、そこではたらく人たちの手から、たくさんの知恵や技術、歴史の証として、生まれている。ものが生まれる現場、岐阜の小さな工場をたずねて。

常に信念を胸に

“本物”のギターを



ヤイリギター



音程を決めるフレット部分は叩いて高さを微調整する

電灯が点々と灯る工場。作業台に向かう職人たちは、寡黙だ。可児市にある「ヤイリギター」は昭和10年創業の「矢入楽器製作所」を継いだ2代目の矢入一男さんが設立したギターメーカー。戦後、木琴などの教育用楽器なども手掛けていたが、一男さんは「これからはギターの時代が来る」と、本場のギター作りを学ぶため、単身でアメリカに渡る。そこで当時、日本製の量産ギターがまるでおもちゃのように扱われている現状を目の当たりにして決意した。「本物」を作らないかん。

天然木にこだわること、全工程を職人の手で作ること、永久保証であることだ。工場内の倉庫には、長年買い集めた天然木がうず高く積まれている。現在3代目を継ぐ矢入賀光さんは言う。「父はとにかくいい木を集めた。うちの機械はみんな古いでしょ、設備投資にかける代わりに全部木につき込んだんですよ(笑)。でも、それが今、大切な財産。いい木がないとギターは作れませんから。木は少なくとも2年、長ければ10年以上も自然乾燥した後、ようやくギターに生まれ変わる。「樹齢200年の木もあります。だからいい楽器を作り、その先も長く生かしてあげたい」。

一本のギターが完成するまで約3カ月。切斷、曲げ、接合など音や品質を左右する数多の工程に、30人ほどの職人が熟達した技を行使する。側面のサイド材を



ヤイリギターには初心者用、プロ用といった区別はなく、すべてプロが使えるスペックを備えている。「どのギターも長く使ううちに“自分の音”に育つんです」。(右)90年代に登場。日本人向けの小振りで女性も抱えやすい。RF-90RB/180,000円。(左)ヤイリギターフラッグシップモデル。YS-120KM/360,000円(価格はすべて税抜)

熱して特殊な機械で曲げる人、ボディと持ち手のネックを繋ぎ合わせる人、ネックを小刀やカンナで削る人。真剣な眼差しに、職人のプライドが覗く。そして休憩時間になると、ふと誰かがギターの弦を鳴らす。彼らの傍らには、いつも音楽がある。

工場 ヤイリギター 可児市下恵土3230-2 0574-62-1138 <http://www.yairi.co.jp/>
工場見学 毎週土曜の①10:00～、②13:30～(約1時間) ※各回定員10名、要予約 15台



杉山製作所

鉄の可能性に 挑み続ける



①あちこちでパチパチと火花が散る工場で、7人の職人たちが黙々と作業に取り組む。商品は自社でデザインから製作まで一貫して行うため、カタログとは異なるオーダーメイドも可能 ②鉄を繋ぎ合わせる溶接の作業中は、激しい火花が飛ぶ。溶接の跡はブランドのイメージに合わせてわざと残すこともある

鉄を使った家具や建材、陳列棚などの什器の企画デザインから製造、販売までを手掛ける「杉山製作所」は、鉄の加工や溶接を専門として昭和37年に創業。当初は自動車部品を製造していたが、平成12年にアイアン事業部を立ち上げ、店舗用什器ブランド「KEBIN」を発表した。

主材に使用したのは無垢鉄と呼ばれる中身の詰まった鉄だ。空洞があるパイプ状のものに比べて曲げやすく、機械では表現できない自由でゆるやかな曲線を施すことができる。鉄を扱う職人の技術力と無垢鉄の特性を活かした什器は、重く冷たい鉄のイメージを払拭するこれまでにない軽やかなデザイン性によって、展示会で高く評価された。

そして、暮らしの中にも鉄を取り入れてもらいたいと住宅用家



③若い職人も多く活躍。創業から57年、培った技術が脈々と受け継がれている ④角棒や丸棒といった鉄の形や太さなど、選ぶ鉄素材によっても製品の雰囲気が大きく変わる

具の製作に乗り出す。平成22年以降、「クロテツ」や「カンカン」をはじめ、プロダクトデザイナー・柴田文江さんとコラボレーションした「カ」といった雰囲気異なる鉄家具ブランドを次々と展開。平成26年には建材ブランド「C」を立ち上げ、住まいを総合的にコーディネートできる鉄家具メーカーとしての地位を確立した。

「自分たちの技術に誇りを持ち、一人でも多くの方の暮らしに潤いを与えられるようなものづくりを目指しています」と代表取締役の島田亜由美さん。職人が鉄と向き合い、鉄と対話し、一つひとつ手作業で製品を仕上げる手仕事の現場を肌で感じてもらいたいと、工場横にショールームを併設。さらに今年1月にはアンテナショップ



⑤工場に併設するショールームは自由に見学ができる ⑥丸棒を生かした女性らしい軽やかなデザイン。felice チェア mio 410 / 39,000円(税抜)〜



「Tetsukutei」をオープンした。「鉄の可能性を引き出しながら、長く愛着を持って使ってもらえるようなデザインを心がけています」とチーフデザイナーの小玉温子さん。まるで一筆書きで描いたように柔らかな曲線のアイアンフレームの椅子、鉄脚に溶接跡やハンマーで叩いた跡を残して素材感を魅せるダイニングテーブル。洗練されたデザインや職人たちの息遣いが随所に残る家具が、鉄の新たな魅力を伝えている。

工場 杉山製作所 ⑧ 関市旭ヶ丘3-13 ⑨ 共同3台 ☎ 0575-22-0554 <http://www.kebin.jp/>
※工場内ショールームは平日、第2土曜の10:00~17:00見学可能

ショップ tetsukurite ⑧ 関市旭ヶ丘3-13-2 ⑨ 10:00~17:00 ⑩ 土曜(第2土曜は除く)、日曜、祝日 ⑪ 共同3台 ☎ 0575-29-6886

町工場の情熱を ジーンズに託して

ダブルエックス デベロップメント



戦後、アパレル産業が急速な発展を遂げた岐阜市で今、新たな挑戦に踏み出した工場がある。縫製業を専門に行い、今年1月、自社製品のオリジナルジーンズの販売を始めた『ダブルエックスデベロップメント』だ。

「昔からファッションが好きで」と話す社長の戸谷太一さん。高校のファッション科でアパレルの基礎を一通り学んだ後、22歳でフリーランスとして大阪を拠点に縫製の仕事を開始。やがて小さな工場を立ち上げ、セレクトショップから裾上げ業務を受託するなど順調に業績を伸ばしていった。その中で戸谷さんは服作りの企画にも携わり、一連の技術を習得。そして25歳の時、地元岐阜に工場を移転させた。

業による製品の仕上がりにも、顧客からの信頼も厚かった。「でもそれは全部、他社ブランドもの。ふと、工場が服を作って売ってほしいんじゃないかと思っただけです。みんなも『自分が作った服だ』って胸張って言えたらやりがいが増すんじゃないかって」。そこで戸谷さんが着目したのがジーンズだ。ジーンズは、形や素材などに厳格な型はない。だからこそ自由に理想を追求できる。目指したのは、ジーンズのルーツである作業着としての無骨さと、ファッションとしてのスマートさを最もバランス良く兼ね備えた60年代のアメリカのジーンズ。「それを再現できる力が、僕らにはあるはず」。

デザインやパターンなど、すべてを一から制作。数々の工程の中でも、やはり要となるのが縫製だ。縫い目の細かさや、生

地の端から縫い目までの距離、縫い合わせる強度。それらがわずかに変わるだけで仕上りの印象や履き心地が大きく異なる。ウエストやポケット、裾など、縫う場所ごとにミシンのパーツを微調整し、指先の感覚を頼りに縫う。さらに「初めの履き心地は悪いけど、その人だけのしわや色落ちが出るから」と、あえて生地にしわを残す。

「ジーンズが生まれた当時のアメリカを再現したいんです。このまちでジーンズが生まれて、そこに暮らす人がそれを履いて、ちよつと格好よくなる。僕が生まれ育った岐阜をそんな風景があるまちにしたい」。



①戸谷さんを含め、毎日7人で作業にあたる。現在、自社と受注の縫製の割合はおおよそ半々で、工場内に並ぶ何台ものミシンを使い分けながら製品を仕上げている



②戸谷さんはデザインやパターンを引く作業も担当する ③生地は織りやインディゴ染めの品質が高い岡山県産のデニムを使用



④サイズは28~42インチまでの11展開。女性が履けるサイズも。NOCOMPLY ジーンズ (NC66E-60) / 16,000円 ⑤SURE MANUFACTURING コールバッグ-L / 14,000円 (価格はすべて税抜) ⑥工場の2階にはショップを併設



工場

ダブルエックスデベロップメント 岐阜市本荘西3-8 ☎ 058-253-2630 <https://xxdevelopment.com/>

ショップ

☎ 13:00~19:00 🗓 日曜、祝日、第2土曜 📍 3台

小さなやきものが
日々を彩るアクセサリに



①成形の際に使用するプレス機。アクセサリーのほか、役物タイルの生地もここで成形される ②四角形の生地に、筆で一本ずつ線を引いて花びらを表現。1,250℃で焼成した後、中央に金彩を施し、800℃でさらに焼成すると、バラの花のピアスが完成する ③大量に生産しやすいタイルは、同じ形を配した金型が多いが、七窯社では一つの金型にさまざまな形が配されている特注品を使う

鈴木タイル店 七窯社 ななようしゃ



装着時の軽さも魅力。左上から右回りに小花すみれ/2,700円、わたぐも花火・大/3,000円、手描きの小さなタイル・ばら/2,300円、わたぐも藍・小/2,700円



フローチも製作。成形からすべて手作業のシリーズ。左からチュリップ水灰/3,000円、はな・小/3,500円（価格はすべて税込）

モザイクタイル発祥の地、多治見市でタイル卸業社として昭和24年に創業した「鈴木タイル店 七窯社」。昭和59年には関係会社「鈴研陶業」も設立し、役物と呼ばれる建物のコーナー部分に使用される曲がったタイルや面取りされた特殊なタイルの生地の製造も行ってきた。

しかし、3代目の鈴木耕二さんはタイル市場の縮小傾向に懸念を抱き、「タイル生地の加工技術を活かしたオリジナル商品を」と、金魚や動物を模ったタイルの製造を開始。さらなる新商品の開発に没頭していた矢先、インターンシップで訪れた学生の発想に触れ、タイルのアクセサリとしての可能性に気付く。それは、アクセサリにすることで、「装飾」というタイルが持つ役割が、「人を装飾する」ということにも繋がった瞬間だった。

ピアスやイヤリングにするには直径1cm、薄さ2mmほどのタイルが必要。そのため、特注の金型にタイルの原料を投入し、プレス機で押し固めて小さな生地を成形。それを乾燥させたら一つずつ、職人たちが筆を使って絵付けをし、釉薬を塗る。通常のタイル生産の場合、加飾や光沢を出す釉薬はスプレーで噴射するが、生地の薄さから風で飛ばされてしまうため、筆を使うのだ。「小さいので焼成も絵付けも技術を要します」と鈴木さん。金彩などの仕上げの絵付けや金具付けもすべて手作業だ。

やきものならではの温かみのある色合いに、乙女心をくすぐる繊細な手描きの模様。耳元に彩りを添えてくれる小さな陶器のアクセサリには、特殊なタイルを生み出してきた歴史と、職人たちの技術が詰まっていた。

地元で愛される牛乳を
いつまでも届けたい



①工場では牛乳のほか、コーヒー牛乳やフルーツ牛乳なども生産している。すべて合わせて1日約4,000ℓが生産される ②生乳を専用のタンクに移して低温殺菌を行う。鮮度が重要なため、殺菌後は瞬時に冷却され、すぐに瓶やパックに注がれていく ③熟練スタッフの目視によって最終段階の検品が行われる

関牛乳



関市内のほか近郊のスーパーやコンビニでも販売。1ℓパック/各310円、ブリックパック/各130円、牛乳ビン/各140円（価格はすべて税込）

半世紀以上にわたり、関市を中心に多くの人に飲まれて続けている「関牛乳」。その歴史の始まりは、昭和13年に初代が開業した吉田牧場。小さな牧場から徐々に経営規模を拡大し、昭和25年に飲料メーカー「関牛乳」を誕生させた。

関牛乳の一番のこだわりは、60年以上変わらない低温殺菌という製法にある。実は、搾りたての生乳は水に近いさらりとした味わいで、殺菌時に加熱することで牛乳らしいコクや甘みが生まれる。日本では現在、大量生産可能な超高温殺菌が主流だが、この製法では高温の加熱によって生乳本来の成分が変性してしまうため、風味の変化が避けられない。「先代からずっと言われていたのが、「まずは美味しいものを」。だからうちは低温殺菌を変えようと思った

ことはありませぬ」と3代目の吉田幸志さんは話す。

低温殺菌は、65℃で30分間、時間をかけてじっくりと殺菌を行う。なるべく低温にすることで成分の変性を極力抑えることができ、生乳に近いすっきりとしたのど越しや、深いコクがある牛乳が出来上がるのだ。

工場は常時約8人で稼働。毎朝5軒の牧場から生乳が届いてから出荷されるまでのすべての工程で、特に徹底されるのが温度管理だ。生乳の保管温度の10℃以下と殺菌温度の65℃の2つの温度は、担当者がこまめに温度計を確認し、わずかな変動も見逃さないように調整を行う。「私たちのモットーは昔から『地元の人に、美味しい牛乳を』です。皆さんの健康的な食生活の役に立てたら」と吉田さん。創業以来、地域密着で毎日変わらない味わいの牛乳を届けてきた。幼稚園や小中学校の給食、高校の自動販売機、近所の生鮮食品店。関市民のほとんどは、幼い頃から日常の中でこの牛乳に親しんでいる。「高校生のおき、部活帰りに飲むのが楽しみだった」といったお客様の声を聞くのが嬉しいですね。これからは地域の『ソウルドリンク』のような存在でありたい。

工場 関牛乳 関市観音前41 0575-22-0402 <http://sekimilk.co.jp/wordpress/>
直売所 関 8:00~17:00 日曜 4台

工場 鈴木タイル店 七窯社 多治見市高田町8-106 0572-22-0388 <https://nanayosha.com/>
ショップ&ワークショップスペース(令和元年10月オープン予定) 関 10:00~16:00(土曜は15:00まで) ※ワークショップは要予約 日曜、祝日 3台